

巻頭言

中央大学附属中学校・高等学校

学校長 石 田 雄 一

(中央大学法学部教授)

『教育・研究』という本誌のタイトルは、「教育」と「研究」という、今後の中等教育のいわば両輪を表すものとして、本校の紀要に相応しいものである。

かつて大学の学士課程には「一般教育」と「専門教育」という区分があり、前者は一・二年次、後者は三・四年次に配置され、学士課程の「前半」と「後半」をなしていた。しかし、一九九一年の所謂「大学設置基準の大綱化」によってその区分が廃止され、それに伴い様々なカリキュラム改革が進められる中で、初年次教育として「基礎演習」や「導入演習」といった名称の科目が設置されて現在に至る。そこでは入学したばかりの学生が自分でテーマを決めてリサーチを行い、その成果を口頭発表したり、レポートにまとめたりする。学生自身によるこうした主体的な研究活動は、かつては四年次になって初めて「卒業論文」や「卒業研究」といった形で行われたものだが、その開始の時期が一年次にまで引き下げられることになった。それが今、「探究的な活動」として中等教育にまで広げられつつある。

こうした一連の改革の背後には、未来はもはや現在の延長線上に思い描くことができないという不安と焦りがある。それは例えば、新学習指導要領の解説の中で「予測が困難な時代」やら「将来の予測が難しい社会」と言った表現が繰り返し用いられていることからも見て取れる。予測が不可能な時代を生き抜くためには、既存の知識を身につけるだけでは足りず、自ら課題を発見してその解決に取り組む力が必要となる。そうした能力を養うための学習活動として「探究的な活動」が位置づけられている。

教育関係のサイトの伝えるところでは、「探究的な活動」の実施にあたって教育現場から戸惑いの声が出ているという。しかし、本校の教員からは、私の知る限り、そうした声が聞かれたことはない。むしろ本校は時代の要請を先取りするかのよう、学校設置教科「教養総合」を柱とする取り組みによって、新学習指導要領の実施を待たずして「探究的な活動」をカリキュラムに組み込んで

いた。本校がこのように先駆けて時代の要請に応えることができたのは、豊かな学術経験を有する優れた教員陣を擁してきたことの証左である。「探究的な活動」は生徒自らが主体となって行うものだが、当然のことながら、それを指導する教員にも学術的な経験が求められる。教員自身が研究活動を行っていないければ、生徒を主体的な探究活動に導くことなどおぼつかないからである。

かつて大学設置基準の大綱化によって一般教育課程と専門課程の境界が取り払われたように、今、大学と高校との間の境界も薄らぎ始めている。それが所謂「高大接続」の目指すところだが、とりわけ中央大学では「総合学園構想」の一環として、生徒が大学の単位を先行履修する科目等履修制度が実施に移されるなど、大学と附属校との垣根を取り払う動きが進んでいる。そうした中で、教員に求められる資質や能力に関しても、「中等教育」や「高等教育」といった区分が意味をなさなくなる。大学の授業に高校生が科目等履修生として参加するようになれば、彼らを意識した授業を展開しなければならなくなるが、他方で、中学や高校の側でも、生徒を段階的に主体的な探究活動に導いていく以上、教員はこれまで以上に学術的経験が求められるようになる。本校が、そうした時代の要請に応えうる高い資質と能力を備えた教員陣を既に擁していることは、本誌『教育・研究』をバックナンバーも含めてひも解き、そこに掲載された数々の優れた研究論文に目を通せば、一目瞭然である。『教育・研究』は、その表題の通り、本校に所属する全ての教員の、「教育」と「研究」という密接に結びついた二つの活動の精華であり、時代の要請に応えるべく本校教員が研鑽に励む場としますます重要な役割を担うことになるだろう。

最後で恐縮であるが、本号の編集の作業を取り纏めて頂いた饗場実教諭、笹部晃子教諭、平野誠教諭には心より感謝を申し上げます。